

安全で安心できる幸せな学校づくりに向けて

— 創立 140 周年を迎えて —

I はじめに

「みんながいるから安心」、学校にはいつも、保護者や地域の方々が子どもたちと一緒に活動している姿がある。地域の大人が子どもたちを幸せにする。子どもたちの元気が、地域を幸せにする。そんな幸せを共有できる学校であり続け、さらに進化させたい。

本校がある柱野地域は、四方を山に囲まれ、中央には錦川の支流御庄川の清流が流れるなど豊かな自然に恵まれている。しかしながら、山峡の地域から、過去に幾多の自然災害を経験している地域でもある。

現在、児童数は18名で、校区内人口は約520人、少子高齢化が進んでいる。本地域は市街地まで7kmと近く、幹線道路も通り、古くは万葉の時代から交通の要所となっている。

そして、本校は、本年度創立140周年を迎える。地域の方々から物心両面にわたる絶大なる支援があり、教育的関心も強い。こうした風土の中、児童の教育環境は極めて整備されたものとなっている。

II 研究の概要

1 研究の目的

主たる目的は、社会や時代の変化という「流行」の中で、激変する社会に主体的で、自らの将来や地域社会を力強く切り拓いている子どもたちを育てる「不易」たるものを学校教育において実現するという考えのもと、その目的の実現のための学校づくりをめざし、家庭や地域と一体となった取組を推進していく。

(1) 学校経営方針への位置付け

学校教育目標を「ふるさとを愛し 豊かな心をもちたくましく生き抜く 柱野っ子の育成」と掲げ、その育成基盤となる、安全な環境で安心して生活できる学校づくりをめざしていくこととした。

① めざす子ども像

三つの肯定感をもった子どもの育成をめざす。

【地域肯定感】

ふるさとにいつの日にも深い愛情と誇りをもち、主

体的に社会の発展に尽くす子どもを育成する。そのため、将来の地域の担い手となる意識を育む教育を実践することで、ふるさとが大好きな子を育てる。

【他者肯定感】

様々な人とのつながりをもち支え合う中で、豊かな人間性を育み、誰にでも優しい子を育成する。日常で育つ三つの美しい心『素直な心』『反省の心』『感謝の心』を掲げ、地域総がかりでの取組を推進する。

【自己肯定感】

夢や希望をもって、自らの将来を切り拓いていく力を育成する。そのため、多様な体験活動や人との関わりを通して、自分のよさに気づき、自分の可能性を発揮する中で、自分に自信がもてる子を育てたい。

② めざす教師像

和と信頼を基調とした教師集団をめざす。

- ・進取的で行動力を持ち、一日一日を大切にする教師
- ・一人一人を大切にし、最後まで支援する教師
- ・保護者や地域に寄り添い、連携・協働する教師
- ・心豊かで高い専門性を持ち、期待に応える教師

③ めざす学校像

コミュニティ・スクールの仕組みを活用し、家庭や地域と連携した取組がさらに充実することを願って、『子どもや保護者、地域そして教職員にとって安全で安心できる学校～「なかよし日本一」の学校』と掲げた。

(2) 重点取組事項の設定

これまでに築き上げられた安全・安心という校風を受け継ぐこと、そして新学習指導要領の完全実施など、現在を教育の変革期と捉え、これからの将来の学校像を示すことが大切ではないかと考えた。

そこで、小規模校のよさを活かし、本校だからできる教育を重視し、本年度のアクションを『少人数のよさを活かした学校・学級づくりの推進～一人一人の成長保証～』と掲げ、以下の通り、具現化していった。

- ・**は**きはきと…授業で勝負（一人一人の確かな学力の定着、学級経営の充実）
- ・**し**あわせに…安全で安心な環境づくり（学習環境・

言語環境・教育環境の整備)

- ・**く**しく…豊かな心と健やかな体の育成 (体験活動や心を揺さぶる活動の充実)
- ・**の**びのびと…主体的な関わりを重視 (目に見えるつながり、小小・小中・地域連携)

校名の「はしらの」の文字を使って、誰でも、いつでも、いつまでも実践できるように設定した。

以上のことを踏まえ、本校は「なぜ、安心で安全な学校をめざすのか」「なぜ、みんなが幸せな学校づくり」をするのかを、子どもや保護者、地域、そして教職員が共有し、納得解が得られる取組に挑戦し続けたい。

2 研究の実際

(1) 学校安全の方針・目標

＜目標＞

- ① 家族や地域の人に感謝し思いやりをもって、安全に貢献できる資質や能力を育む。
- ② 児童一人一人が自他の生命を尊重し、危険を予測して安全に行動できる能力を育む。
- ③ 家庭や地域と連携し、安全・安心な環境 (学校や地域) づくりを行う。

＜運営の重点＞

- ① 安全ボランティアの方とのふれあい等を通して、感謝の気持ちや思いやりの心を育てると共に、家庭・地域の一員として自分にできることで周囲の人を支援しようとする態度を養う。
- ② 防災教室や避難訓練などKYT等体験活動を通して、危険予測や危機回避ができる能力を育てる。
- ③ 計画的な情報発信や参加型の行事等の開催を通して、来校者数を増やし、家庭や地域に開かれた学校づくりに努める。
- ③ 緊急時のメール配信システムを活用した児童の安全確保や、地域の受信者増加に向けた取組を行う。
- ④ 定期的な安全点検や日常的な学校施設点検を行い、PDCAサイクルの確立を重視した取組を推進する。

(2) 学校安全3活動の取組

① 安全教育の活動概要

ア 教育課程に位置付けた安全指導の充実を図る。

- ・全体計画に沿った教科領域による安全教育の実施
- ・防災出前授業の開催 (専門家活用、保護者参加)
- ・心肺蘇生講習会への児童参加 (公民館連携)
- ・全学年自転車教室 (駐在所や県警による指導)

イ 特別活動や児童主体の活動で思いやりの心の育成・安全意識の高揚を図る。

・集団登下校の実施

(「交通安全の誓い」

唱和、挨拶指導、

地域住民の声を

伝達)、通学路清掃

・安全・安心マップの

作成と周知

＜自作の安全・安心マップ＞



ウ 参加型参観日による保護者への啓発を行う。

・性教育参観日

・人権教育参観日

・学校保健委員会

・着衣泳と心肺蘇生講習会 他

エ 危機管理マニュアル・応急対策計画・対処要領に

よる訓練の実施と

指導の充実を図る。

・防犯教室

・不審者、火災

地震対応避難

訓練

・日時等を事前に告

・地域と連携した合同避難訓練



オ 岩国市防災メールへの登録により、素早い対応や児童への指導を行う。

カ 日常点検による児童の安全意識高揚と危機対応への実践力を高める。

・日常点検や通学路点検 (児童と教師目線)

・学校評価項目への位置付けと取組検証

②安全管理の活動概要

ア 教育相談体制の充実・強化を図り、全教職員の共通理解のもと指導を行う。

・週1回の「いきいきアンケート」の実施

(マンネリ化を防ぐため、ネガティブ発問項目の設定や表情認知などの工夫を行う)

・計画的な教育相談の実施 (学期に1回、不定期)

・定期的な「児童理解の会」の開催

・専門家による相談や講話 (新型コロナウイルス感染拡大防止に係る臨時休業中の児童のケア他)

イ 全教職員による点検と巡視の徹底を図る。

・複数、担当場所交代制による学校施設点検

・校内巡視チェックシートの活用

ウ 危機管理マニュアルの確認と見直し

・カード化して、職員室や教室等に掲示

・学校運営協議会への周知、協力依頼

③組織活動の活動概要

ア 保護者への啓発とPTAとの連携

- ・参加型参観日の計画的実施(防災教室他)
- ・教育活動(行事、遠足等)の協働実施
- ・児童引き渡し訓練、見守り活動
- ・児童、保護者、地域、教職員による評価

イ 地域との連携

- ・安全ボランティアの会(児童参加、年2回)
- ・自作ハザードマップの全戸配布
(地域住民の体育館への避難所経路の明記)
- ・「子ども110番の家」訪問
- ・地元消防団活動の見学(学校プール清掃時)
- ・学校便りの全戸配布による情報発信(メール配信システムや学校ホームページの活用)
- ・コミュニティ・スクールの仕組みを活用した地域ぐるみの安全活動の推進(学校運営協議会でのコミスク取組の紹介、将来像の熟議)



- ・参加型参観日と交流会(学校公開日の設定、三世代交流行事の開催、安全ボランティアの会の実施、地域高齢者サロンへの参加)
- ・合同運動会や「柱野ふれあいフェスタ」の開催



＜地域住民と集合写真(合同運動会)＞

- ・地域のよさ発見「ウォークラリー」の開催
- ・地域(市、公民館、自治会連合会、老人会、駐在所、郵便局、社会福祉協議会他)との合同避難訓練
- ・体育館避難所体験と防災キャンプ(簡易ベッド・簡易仕切り作り、炊き出し、防災講座、防災飯作り、非常食試食、地域の災害史や関連史跡紹介等)



＜炊き出し訓練の様子＞

- ・三世代一汗運動や奉仕活動
- ・新型コロナウイルス感染防止マスク作成と配付

(3) 学校安全3領域の具体

① 「生活安全」の実践例から

保護者や地域の方々への見守りに感謝すると共に、一人一人にできることがあることを学ばせる意図で、交流活動や参加型の参観日を設定した。学校からの手紙を届けたり、子ども110番の家を訪問してお礼を伝えたりした。また、学校にも来ていただき、一緒に体験したりすることで、地域の方に子どもを知ってもらい、また、子ども自身が地域の人を知る機会となっている。安全・安心は学校だけでできるものではなく、より多くの方の目が必要である。「いつでも学校においでください。」と伝えているが、「何もないのに行きにくい。」とは、地域の方の弁である。より来校者数を増やし、地域とともにある学校にするためには、計画的に交流できる場をこれからも仕組んでいきたい。

② 「交通安全」の実践例から

毎年4月に、児童と保護者、安全ボランティアで通学路点検を行い、通学路の安全の確認を行っている。そして、得た情報を基に児童がハザードマップを作成している。2年に1度作成し、1年目は出前授業時に専門家の指導をいただき、2年目に全児童や保護者、地域に紹介・発表している。内容は、交通だけでなく防犯や災害への予防情報も入れている。また、自作ハザードマップは、地区内全戸に配布している。児童の危険予測の意識の向上や地域住民の通学路整備へのご支援につながっている。

また、本校体育館は地域で唯一の避難所となっているため、住民向けに体育館までの避難経路を示し、情報として伝え、市配布の資料と合わせ有効に活用できるようにした。

③ 「災害安全」の実践例から

本地域は、戦後の2度の台風による大洪水や土砂崩れなど、幾多の山津波により多くの犠牲者や大きな被害を受けてきた過去がある。その被害の怖さを忘れないため、また犠牲者の霊を弔うために、毎年納涼祭が開催されている。学校も合同で参加している。併せて、自治会や公民館と共催し合同の避難訓練も実施し、自助や共助の仕組みを確認した。

過去には、毎年210日の厄日には、台風からの安全を願い、地元の小学3年生～6年生までの男子が、たいまつや提灯を持って、近くにある大鵬山に祀られている風神様に加護を祈った風習があった。時と共に、この風習はなくなったが、地元有志の方々と学校が協

力して、この祭りを復活した。祭りの復活はもちろん、地元住民や子どもたちの防災意識の高まりや安全な街づくりに向かう団結力がうれしい。



風神様への参り（大鵬山登山）

Ⅲ 成果と課題

<主な成果>

① 情報共有体制の確立

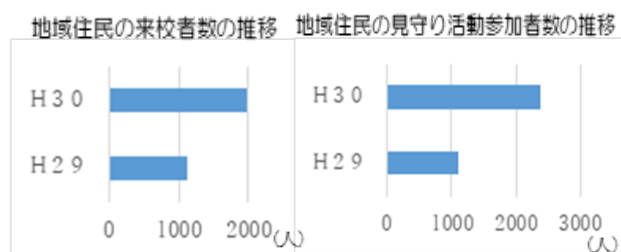
メール配信を全家庭に登録いただき、学校で集中管理できるシステムをとっている。また、情報は地域にも発信しており、緊急時には安全ボランティアの協力を得ることができるなど、更に連携強化を図っている。

また、学校便りやハザードマップ、学校評価結果等を保護者だけでなく地域にも知らせることで、学校の取組に理解を求めるとともに、子どもをより知ってもらい「安全で安心な学校」という信頼でつながる関係を構築することができている。

② 継続したコミスク等による安全活動

年6回の学校運営協議会の開催や学校便りの配布、学校ホームページの活用等を通して、地域からは、「学校便りを読むと、近所の子どもの様子がよく分かります。」「子どもの顔が見えるようになりました。」という声をいただいたり、安全ボランティア関係者の会や学校行事への参加者が確実に増えていたりしている。

今後も、時間軸と空間軸を意識して、この地区の災害の歴史や長年にわたる安全への取組を継続・進化させるとともに、学校や家庭・地域が一体となった取組を通して、「みんながいるから安全で安心」な学校づくりをしていきたい。



③ 子どもの安全意識の高揚

児童会委員が、自作したハザードマップについて全児童に、危険箇所や危険内容の確認をしている姿、また学校公開日には、保護者や地域の方々の前でハザードマップの紹介をしている姿、体育館までの避難経路の提案をしている姿、すなわち子どもたちには、主体

的に行動する力や、人や社会の安全に貢献しようという意識が高まっていると確信している。

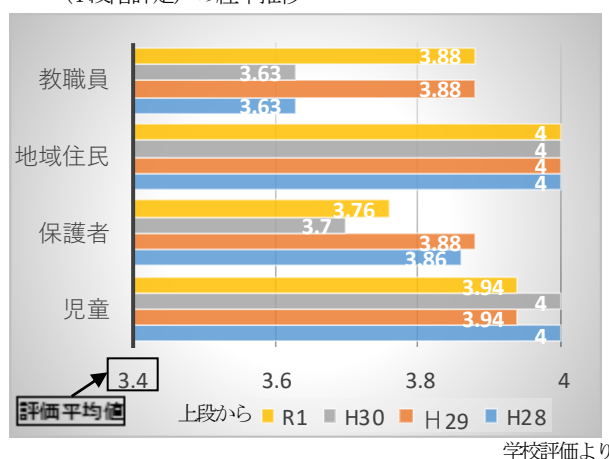
④ 地域ぐるみの学校安全の取組の定着

子どもたちは、毎朝保護者や地域の方々と一緒に登校している。元気に登校している子どもには、どこからともなく優しい声がかかる。寒さが厳しい朝には、子どもの手が誰かにそっと握られている。

学校評価を見ると、教職員・地域住民・保護者・児童とも、「安全や安心」に関わる項目では、全項目の例年平均値約3.4よりポイントが高くなっている。

『子どもは地域の宝』『子どもに期待し、子どもに託してきた』風土がこの地域にはある。その基盤となるのが学校安全への取組ではないかと思う。今後とも活動の継続と進化を続けていく必然性がある。

「力を合わせた安全・安心な学校づくりへの取組」
(4段階評価)の経年推移



<課題と今後の取組>

○主体的な安全教育と教職員研修の確保

新学習指導要領の完全実施や岩国市小中一貫教育の実施を受け、安全学習の主体的学びを追求する授業改善や、教科横断的で連携を意識したカリキュラム・マネジメントの確立など、学校教育活動全体を通した「安全教育」の充実をめざしていかなければならない。そのため、学校安全に係る教職員研修を充実させることで、目標の具現化を図りたい。

○地域安全のための学校の役割の明確化

地域の方から、自作の「生活便利帳」が学校に届いた。中身は、高齢者の生活を助ける地元企業や店舗が記載されていた。長年学校支援をいただいていた地域に、これからは学校が地域貢献をする必要性が大きくなったと感じた。「安全で安心な学校」から「安全で安心して暮らせる地域の中の学校」という意識をもち、学校と家庭、地域の力を結集して取り組める仕掛けをしていきたい。そして、みんなで幸せを共有したい。